

## 糟谷報告へのコメント

糟谷報告は、21世紀に日本が東アジア諸国との間に良好な関係を築く上で必要と考えられる「歴史認識の溝を狭める」という課題に応えるべく、主に高等学校の日本史と世界史の教科書の朝鮮関係記述の分析を通じてその課題と展望を示したものである。個々の記述内容に関する問題提起は、朝鮮史を少しでも勉強したことがあれば首肯できるものばかりで、特にコメントをする必要はなかろうと思う。そこで、やや違った側面からいくつか質問を差し上げると同時に、歴史認識の問題について私見を申し述べることによってコメンテーターの責をふさごうと思う。

まず、教科書についてであるが、そもそも朝鮮史に関する記述が少ないのは何故なのか？ 言い換えれば、どの分野をどれだけ分量で書くということは、誰がどこで決めているのか？ さらに言えば、執筆者を誰がどうやって選択しているのか？ 糟谷報告にもあったように、現状では朝鮮史関係は中国史の専門家が書くケースが多いようであるが、朝鮮史の専門研究者は何故教科書執筆者にほとんど入らないのか？ 教科書の内容について糟谷報告が指摘した問題は、突き詰めればこうした部分が明確になり、それに対する対処案が立てられて初めて解決する問題であるように考えられる。逆に言えば、それができれば比較的容易に解決・改善への道筋は付けられるように思える。この点について、私は教科書作成の現場を知らないので、何か知見をお持ちであれば伺いたい。

次に、第五節で触れられた「奇妙な朝鮮史像」についてである。糟谷報告が指摘した類型のうち、①、②、③、⑤は、かなりの部分が史実の誤認や知識の不足から来ているので、これらについては教育の充実による改善が期待されるのにたいして、④はなかなかやっかいである。この「当時の国際関係からやむをえなかった」論はなかなか強靱な生命力を持っていて、論理的に封じ込めるのはかなり困難である。その意味で報告の「日本の政策選択の問題性」を問えという指摘は、理論的な武器になりうる内容を持っていると思われるので、もう少し具体的にお聞きできればと思う。

最後に、糟谷報告全体に関わる、歴史認識の問題について簡単に述べておきたい。近年、歴史認識の「共有」という言葉をよく聞くようになった。これらは一見すると大変良いことのように思えるが、私はこうした表現が一人歩きを始めていることに実は危惧を覚えている。「歴史認識」とは、史実の積み重ねを前提として、総体としての歴史をどのように考えるのかという、まさに「思想」の問題であって、個々人で異なるものである。それを、誰かが作り上げた「歴史認識」を皆が共有すべきであるとなったら、これは思想統制である。皆が同じ思想を持つことを強要される社会がどのようなものであるか、戦前の日本の例を引くまでもあるまい。数年前、EUがナチスに関する記述にある種の規制をかけようとしたことがあった。ナチスに批判的であらねばならないという趣旨であったが、ヨーロッパの歴史学者の大反対にあったという。たとえナチスを擁護するような言説であっても、発言の自由は保障されるべきだというのが彼らの主張であった。我々に置き換えて見れば、日本の朝鮮支配を正当化するような思想に耳を貸す必要はないが、かといってそうした思想を封殺してしまっていていいということにはならないということである。問題は、誤っていると思える思想が流布したとき、その拡散をどう防ぐのかである。そこで重要になってくるのが、「事実をいかに正確に広められるか」であり、その意味で教科書に課せられた責任は重大である。正確な事実が皆に共有されていれば、異なる思想を持った者同士であってもその土台の上で議論が成立しうる。

現在はこの「正確な事実が皆に共有」されていない状態であり、実際、朝鮮支配を正当化する人々（特に政治家）の発言は、あまりに低レベルで聞くに堪えない。思想形成の前提たるべき知識が決定的に不足している。「歴史認識」の共有は出来ないし、恐らくはしてもいけない。しかし、「歴史知識」の共有は出来るし、しなければいけない。その意味で、教科書の重要性を指摘した糟谷報告は傾聴に値するし、「歴史認識の共有」ではなく「歴史認識の溝を狭める」という表現を用いたことにも、私としては強く共感するものである。

#### 谷口報告へのコメント

非常にスケールの大きな話で、私に十全なコメントをする能力はないが、朝鮮に関してだけ簡単にコメントしておきたいと思う。18世紀中葉（以降）に否応なく世界市場に連結されたということでは朝鮮も例外ではないが、その後の展開がインドとは大分様相を異にしているように思える。確かに米は日本に搬出されるが、それは「世界商品」としてではなく、基本的に日本国内消費用であった。ちなみに、植民地朝鮮は制度上は「日本」なので、正確には輸出ですらない。また、東洋拓殖株式会社をはじめとする日本（人）地主への土地の集積は進むが、景観が一変するような大規模開拓が行われたわけではなく、もともとあった農地が編成替えされた形である。また、「住民の生活の質を向上させることに殆ど無関心な政治支配体制の下におかれた」とも考えにくい。日本の朝鮮支配は、すでに1890年代中盤の甲午改革の頃から日本型の近代を朝鮮に扶植することを目的としており、1906年初頭にソウルに赴任する初代韓国統監伊藤博文も、日本型の近代が定着し、その恩恵に与るようになれば、朝鮮人は自然と日本に従うようになると素朴に考えていたようである。つまり、日本の朝鮮支配の場合、ひたすら収奪するというよりは、日本化して同化する（同権ではない）という方向に進んだ。インドとはかなり状況が異なる。ここで考える必要があるのは、おそらく植民地のタイプの差異なのだろう。ヨーロッパが物理的に遠距離にあるアジア植民地を「飛び地」として支配するのと、日本が自らを中心に膨張しながら周囲を飲み込んで支配していくのとでは、自ずとその性格が異なってくるであろう。「一視同仁」や「同文同種」といった類のスローガンやイデオロギーを標榜していた日本においては、朝鮮民衆を日本に引きつけることが重要だったのであって、そのために有効だと考えていたから日本型の近代を「惜しみなく」投入した。もちろん、どちらがより良いか、悪いかという問題ではないが、恐らくは植民地にならなかったタイなどでも様相が違っていただろうし、こういった植民地の類型（植民地にならなかった地域も含めて）の差異も視野に入れていくと、より万全な形の議論になっていくのではなかろうか。